

# 佛蘭西書巡覧 26

平山 弓月



しかしカミュは思想家であると同時に文学者ですから、その思想が時代に適しているだけでなく、その表現もまた新鮮で人を惹きつける力をもっています。殊にかれの初期作品の文章は、単純で陰影があり、乾燥していてみずみずしいといった、ふしぎな味わいを持っています。

佐藤 朔

Aujourd'hui, maman est morte. Ou peut-être hier, je ne sais pas. J'ai reçu un télégramme de l'asile : « Mère décédée. Enterrement demain. Sentiments distingués » Cela ne veut rien dire. C'était peut-être hier.

きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが。私にはわからない。養老院から電報を貰った。「ハハウエノシライタム、マイソウアス。」これでは何も分からない。恐らく昨日だったのだろう。

(佐藤朔・窪田啓作訳)

フランスの小説の中で、誰もが知るこの書き出しは、1957年にノーベル文学賞を授けられた**アルベール・カミュ Albert Camus(1913-1960)**が、まだ第二次世界大戦の戦火が止まない1942年に世に問うた『異邦人』*L'Étranger*の冒頭です。

カミュが生を受けた地、アルジェリアは当時フランスの植民地でした。父はフランス出身の貧しい入植農夫で、母はスペイン系の最下層の出身でした。その父も小説家が生まれて間もなく、第一次世界大戦に従軍し戦死を遂げてしまいました。残された母と兄とともに、アルジェの町に移り住み、貧しい生活を余儀なくされました。知的教育的環境は最悪でした。そんな中彼は奨学金を得て、大学にまで進みました。大学教授資格を目指したのですが、彼の健康状態がそれを許しませんでした。

こうした中、1937年に『表と裏』*L'Envert et l'Endroit*と題されたエッセーで文学の世界での歩みを始めました。

また、1938年にはジャーナリズムの世界に入り、いくつかの新聞の発行にかかわりました。しかし彼は、ことに際して出处進退がきわめて明確で、しばしば人とぶつかることとなり、時には敵を作ってしまう。第二次世界大戦がはじまると、志願をしましたが、今度も健康上の理由で拒否され、パリで「コンバ」紙の地下発行に携わり、レジスタンス運動に加わりました。

同時期に彼が書いたのが、『異邦人』だったのです。アルジェに住むサラリーマンムルソーを主人公に一人称態で語られる物語りは、書き出しからも窺えるように、複合過去形が多用され、独特

の文体を形作っています。

ムルソー青年は、母親の埋葬には出かけますが、翌日には女友達と浜辺で遊び、映画を見、さらにはその夜にはベッドを共にするのです。あげく隣人たちのトラブルに巻き込まれ、アラブ人を拳銃で「太陽のせい」で射殺してしまいます。裁判では、ムルソーの、社会的でない振る舞いが禍して死刑の宣告を受けたのです。

Comme si cette grande colère m' avait purgé de mal, vidé d'espoir, devant cette nuit chargée de signes et d'étoiles, je m'ouvrais pour la première fois à la tendre indifférence du monde. De l'éprouver si pareil à moi, si fraternel enfin, j'ai senti que j'avais été heureux, et que je l'étais encore.

あの大きな憤怒が、私の罪を洗い清め、希望をすべて空にしてしまったかのように。このしるしと星々とに満ちた夜を前にして、私ははじめて、世界の優しい無関心に、これほど世界を自分にちかいものと感じ、自分の兄弟のように感じると、私は、自分は幸福だったし、今もなお幸福であることを悟った。

母親の死に際しても、世間の人びとなら感じ、習慣的に取る行動をとれないムルソーは、社会的にみると、危険極まりない「異邦人」なのです。しかし、ムルソーからすると、彼は普通の人間であり、自分に正直であり、いわゆる「社会的演技」を拒否しただけなのです。

カミュの考えでは、人間が置かれている条件は「不条理」であり、人はあらゆる種類の圧政と暴力には反抗すべきなのです。植民地アルジェリアでの生活、ナチスの占領下における抵抗運動などの経験が、彼の考え方を形づくったのでしょうか。

第二次世界大戦後の、混んとした状況にいた世界中の若者たちは、カミュの文学世界に、サルトル（改めて取り上げます）のそれと並んで、激しく惹きつけられたのです。じっくり味読してください。

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)